

# 商業革命から生活革命へ

——消費社会の是非に関連して——

山口 正 春

## 目次

- 一 はじめに
- 二 商業革命期の経済的繁栄
- 三 衡示的消費の浸透と各種レジャー施設の誕生
- 四 消費社会における奢侈と逸楽の賛否両論
- 五 結びにかえて

### 一 はじめに

一七世紀から一八世紀にかけては西ヨーロッパ諸国が

アジア、アフリカ、新大陸などを侵略し植民地を獲得し、それらの地域から従来のヨーロッパには知られていなかったか、ほとんど普及していなかった茶、砂糖などの新奇な商品や物産を大量にもたらすことになった。その結果、ヨーロッパの貿易構造が大きく変化した。このよ  
うな変化は植民地貿易でもっとも成功したイギリスで、とりわけ際立っていた。すなわちイギリスにおいては  
一六六〇年の王政復古からアメリカ独立戦争に至るまでの約一世紀余りの期間、イギリスの対外貿易は量的・質

的に激変し、輸出入額の飛躍的増大が見られ、輸出入品目にも大きな変化が現われたのである。

敷衍すれば貿易量は、一七世紀半ばから一八世紀半ばまでの一世紀の間に四倍に、一八世紀初頭から半ばまでも約二倍に急増した。貿易相手国も転換し従来のヨーロッパ諸国を主な取引相手とする貿易構造が、新大陸やアジア、アフリカを中心とする構造に転換し、それに伴ってイギリスからの輸出品目も、毛織物に代って綿絹、麻などの再輸出品を含む新奇な商品、物産に様変わりをしたのである。<sup>①</sup>こうした劇的な変化の現象をイギリスの貿易史家R・デイビスは「一七六〇年以降の一世紀間における目覚しい経済上の諸変化が、ほとんど産業革命との関連で生じたように、一六六〇年以降の一世紀余りに起った経済変化は、貿易と結びついていた。……それゆえ、王政復古からアメリカ独立戦争に至るまでの期間に商業革命の名前を与えるとしても不当ではあるまい<sup>②</sup>」と述べている程である。

劇的な貿易構造の変化の中でも、アフリカから奴隷を新大陸へ、新大陸から砂糖、タバコなどをイギリスへ、イギリスから毛織物・諸工業品を新大陸ないしアフリカ

へ、と言う、いわゆる「三角貿易ルート」が次第に重要視されるようになってきたのである。三角貿易の成功は、貿易に従事する商人の地位向上に結びついた。王政復古前のイギリス社会で最も影響力をもっていたのは地主であったが、一七世紀後半からは都市の貿易商人の存在感も大きくなっていった。この貿易の飛躍的増加による商業の発展は劇的であったために、デイビスによって「商業革命」と名づけられたのだが、この商業革命によってイギリスに莫大な富をもたらすとともに、市民層や下層民衆から成る国民大衆の所得を増加させることになったのである。

商業革命を背景に起った経済変化は、イギリスの社会生活に大きな変化をもたらし「生活革命」と呼ばれる現象を生み出した。<sup>③</sup>と同時に商業革命から生じた生活革命の時代は、ボーゼイの言う「都市ルネサンス」<sup>④</sup>の時代でもあり、ロンドンを始めとし地方都市においても都市的な生活文化と言われるものが誕生した。<sup>⑤</sup>このように、イギリスにおける商業革命による富の蓄積と国民大衆の所得増加、さらに海外から輸入される植民地の商品、物産は、イギリスの人々の消費を多様化させ生活革命と呼ば

れる程に暮らしを豊かにし、これが国内市場を飛躍的に発展させたのである。換言すれば国民大衆の生活水準は向上し、茶、コーヒー、タバコ、砂糖、絹などの奢侈品、贅沢品、装飾品も大衆化し、とりわけ一六八〇年頃からは労働者の賃金上昇、人口増加とともに、国内市場は飛躍的に拡大し、いわゆる「大衆消費」「大量消費」の時代となっていたとも言えよう。<sup>(6)</sup>

小論では、商業革命に焦点を当て、商業革命のインパクトによってイギリスの貿易構造、加えて経済社会および国民大衆の生活が如何に変容したか、この変容ぶりに対して聖職者を含む支配者層や知識人層が、どのような見解を抱き、どんな態度を示したか。そしてイギリスが世界に先駆けて産業革命を進める上で、商業革命が如何なる側面で貢献したか、こうした点を紙幅の許すかぎり明らかにしてみたい。

- (1) 玉木俊明『近代ヨーロッパの誕生—オランダからイギリスへ—』、講談社選書メチエ、二〇一五年、四四頁。  
長島伸一『世紀末までの大英帝国』、法政大学出版社、一九八七年、一二頁。

商業革命から生活革命へ（山口）

- (2) R. Davis, *A Commercial Revolution: English Overseas Trade in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, 1957, p. 3.

- (3) マサイアスによれば、事実、商業革命によってもたらされた「輸入品は、戦略必需品ではなく、絹、木綿、茶、種々の香料などの奢侈品であった」と言う。Peter Mathias, *The First Industrial Nation — An Economic History of Britain 1700-1914*, Second Edition, 1983, p. 82. (P・マサイアス『最初の工業国家』〔改訂新版〕（小松芳喬監訳）、日本評論社、一九八八年、九九頁。)

- (4) P. Borsay, “The English Urban Renaissance: the development of provincial urban culture 1680-1760”, in *Social History*, no.5, pp. 581-603.

- (5) D・S・ランデス『西ヨーロッパ工業史』（石坂昭雄・富岡庄一訳）、I、みすず書房、一九八〇年、二六一頁。

- (6) 角山栄・川北稔編『路地裏の大英帝国—イギリス都市生活史—』、平凡社、一九八二年、一一—二頁。

## 二 商業革命期の経済的繁栄

商業革命によって起った経済変化は、新大陸、アジア、アフリカの植民地との貿易で、茶、コーヒー、タバコ、

綿製品、絹製品といった新奇な商品、物産がイギリスに流れ込み、これがイギリスの社会生活に変革をもたらし、生活革命と呼ばれる現象を生み出したことは、すでに述べたところである。当時こうした社会現象を背景にして、イギリス社会は、いわばコマージュリズム、コンシューマリズム、ジャーナリズムの合体した展開を見せていたのである。新奇な商品、目新しい情報などが、次々と生みだされており、人々はその後を夢中で追いかけている有様であった<sup>①</sup>。当時のイギリス社会に生じていたのは、いみじくもマッケンドリックが「消費革命<sup>②</sup>」と呼んでいるもの、つまり需要の増加であり、消費の民主化であり、消費社会の到来であった<sup>③</sup>。

経済学史的に見れば、この時期はイギリスにとってはマルクスの言う、いわゆる資本の本源的蓄積期であった。広大な植民地建設をすでにほぼ終え、新大陸、アジア、アフリカとの貿易をも含めてイギリスの外国貿易は著しく進展し、かなり長期にわたるウィッグ政権の平和政策もあずかって、イギリスは豊かな輸入奢侈品、贅沢品、装飾品を享受しうる段階に到達していたのである<sup>④</sup>。事実、イギリスのぶどう酒、ブランデー、絹、茶、コー

ヒー、香料などの輸入は、莫大な数量にのぼった。そしてイギリスは、これら大部分の商品の最大の市場であったのだ。

イギリス国内では、上述の資本の本源的蓄積期の保護政策により、毛織物、絹織物、綿織物を始めとする繊維工業および金属工業、化学工業、醸造工業ほか各種のマニュファクチャの著しい進展が見られた。新しい製品が開発され、国内の各種の奢侈産業が発展した。そのような状況の下で、後にも述べるように、国民大衆の奢侈品、贅沢品の類いへの消費増大は、社会の倫理・道徳問題にまでなり、贅沢な生活態度および奢侈と逸楽の風潮を改めさせ、質実剛健の気風を国民大衆に拡めようとして「風俗改革協会」が、一六九〇年より一七六〇年頃までに創設されたのである<sup>⑤</sup>。

国内産奢侈品の消費は、外国産奢侈品の消費とともに、衣・食・住にわたり国民大衆の生活享樂品を増大し、生活水準を向上せしめることになったのである。たとえばダニエル・デフォーは著作『イギリス経済の構図』において、当時のイギリス国民大衆の生活様式を観察して次のように言及している。

「生活様式は鷹揚な上に贅沢で虚栄的であるとともに、濫費とさえ思われる程に出費が多い。国民の気質は、陽気な上に見栄っぱりで、悪徳にふけり、そして不節制に満ちている。そのある者については犯罪にすらなりかねない程であり、その度合は、すべての面で極度に高まってきた<sup>⑥</sup>。」

加えて次のようにも述べている。

「中産の身分の豊かな暮らしは外国産同様、国内の生産物に対する巨大な消費の原因にもなっており、それは世界のいかなる国もこれに匹敵するものがない<sup>⑦⑧</sup>。」「自国の産物と輸入外国産物の国内消費が非常に大きく、また……イギリスの商業がこれ程驚くべき大きさにまで達しているのは、人々の中に二つの階級つまり製造業者と商店主がその労働と、仕事上の勤勉によって得られた利得によるものであり、さらに信じがたい程の彼らの人口に基づくのである<sup>⑨</sup>。」

さらに続けて労働者の生活様式、暮らし向きについては、次のように言及している。

「貧しい人々、日雇い職人、労働し苦役に服する人々

ですら、温かい場所で休み、豊かに暮らし、激しく働き、そして欠乏を知らない。／これらの人々こそ消費の大半をなす人である。……多数の酒屋が暮らしをたてるのも、多くの醸造業者が財産をつくり、さらに巨額の消費税が徴収され、莫大な量の挽きわり麦芽が消費されるのも、これら大衆のおかげである。彼らは経済全体の生命であり、すべては彼らの膨大な数によるのである。彼らの数は何百か何千か、あるいは何十万ではなく、何百万である。実にこの大衆の莫大な数によってこそ、取引のすべての歯車が動きはじめ、陸と海の製品ならびに産物が仕上げられ、加工の上保存され、そして海外の市場に適するように造り上げられる<sup>⑩</sup>。」

引用文から分かるように、経済の実態においては、労働者の消費は、すでに見過ごせない程の重要性を国民経済に与えていたと言えよう。このようなイギリスの状況を最も敏感に示しているのは、大都市ロンドンであった。ホーンが言うように「当時、ロンドンはおランダの港を凌ぎ、ヨーロッパの中で最も繁栄する港であった<sup>⑪</sup>。」またトリヴェリアンは「この国の東インド貿易のすべて、



ヨーロッパ、地中海、アフリカ貿易の大半、それにアメリカ貿易の多くは、事実上、ロンドン港に属していた<sup>12</sup>と述べている。したがってロンドンは、世界の各国の輸入奢侈品や贅沢品の主要な市場であるとともに、海運や造船の中心地でもあった<sup>13</sup>。まさにロンドンは、世界最大の消費都市であると言つてよかつた<sup>14</sup>。

このような状況の中で、衣料奢侈の大衆化の傾向については、とりわけ著しいものがあつた。一七二〇年には有名な「南海泡沫事件」<sup>15</sup>で、富裕な商人が破産したり貴族が没落したりして、その贅沢な服飾品を当時開店しつゝあつた古着屋に売り、その結果、当時新しい社会階級となつた女中たちが競つてこれらの衣服を安く買つて、それを着て喜んで街頭を闊歩したことは、よく見られた光景であつた<sup>16</sup>。衣料の流行を追う競争は、いくつかの階層の間で常に続けられ、その出費が信じられない程になつてしまつたことがよくあつた。この点に関して、マンドヴィルは次のような鋭い観察をしている。

「われわれは、皆、高望みをし、何らかの意味でわれわれに勝っている者を、できるだけ早く模倣しようとする努

めるのである。……織り屋、靴屋、仕立屋、床屋、並びにあらゆる卑しい働き手は、ほんの僅かでやっていけるのに、厚かましくも最初に得たお金で資産のある商人のような衣服をまとう。……薬種屋、呉服屋およびその他信用のある店主たちは、彼らと貿易商の間の相違を認めることができず、それゆえ貿易商のような衣服を身につけ、彼らと同じような暮らしをする<sup>17</sup>。」

ここに見られるように、当時のイギリス社会が如何に衣服の流行やモードを追い求める風潮に染まっていたかを窮い知ることができるのであろう。国民大衆の間では、奢侈的消費あるいはヴェブレンの言う衒示的消費の傾向<sup>18</sup>が顕著に現われていたのである。

因みに言えばヴェブレンは、衒示的消費がステイタス・シンボルとなることによつて、資本主義という新たな社会・経済上の制度が成立してくる際の重要な誘因となつたと見ている、と言つてよいだろう。そして彼によれば衒示的消費は、商業の発展や資本主義の進展と密接な関係をもっており、農村的というよりも都市的な現象であるとして、次のように述べる。

「消費は、田舎より都市の方が生活の標準のいっそう大きな要素となる。……都市の住民はお互いに他人を追い越そうと競争して、彼らの術示的消費の正常の標準をますます高い点につり上げ、その結果として、その都市の一定の程度 of 金銭上の体面を示すためには、この方面の相対的にますます大きな支出が必要となる」<sup>(19)</sup>と。

同様の見解は、ヴェルナー・ゾンバルトによっても示されている。彼は著作『恋愛と贅沢と資本主義』において、王侯貴族の贅沢、浪費、放蕩こそが資本主義の生みの親だと力説している。中世末期の教会、とりわけ法王庁の浪費、絶対王政時代の、たとえばルイ王朝の贅沢三昧、貴族たちの大宴会や乱痴気騒ぎ、それにさまざまな祭典や行列、こうした贅沢、術示的消費こそが資本主義を誕生させたと言う<sup>(20)(21)</sup>。

(1) 上田辰之助『蜂の寓話—自由主義経済の根底にあるもの—』、みすず書房、一九八七年、第一章、第二章を参照。

(2) Cf. N. McKendrick, J. Brewer, J. H. Plump, *The Birth of a Consumer Society: The Commercialization of Eighteenth—Century England*, 1982, chap. 1.

(3) 経済史家サークスによれば、消費市場の拡大は、一七世紀にまでさかのぼることができるという。「消費用品の大衆市場は、これまで産業革命の結果として取り扱うことが習慣となっており、一八世紀以前については重視されていなかった。……しかし編み靴下、編み帽子、安もの陶器、釘、タバコ・パイプ、レース、リボンというような商品の生産に関する一七世紀の証拠は、消費用品の大衆市場が、ずっと早くから存在していたことを証明する。」(J. Thirsk, *Economic Policy and Projects*, 1978, p. 125. サークス『消費社会の誕生』(三好洋子訳)、東京大学出版会、一九八五年、一六一頁。)

(4) 田中敏弘『マンデヴィルの社会・経済思想』、有斐閣、昭和四一年、一二頁。

(5) Cf. Thomas. A. Horne, *The Social Thoughts of Bernard Mandeville: Virtue and Commerce in Early Eighteenth—Century England*, 1978, chapter. 1. ホーン『バーナード・マンデヴィルの社会思想—一八世紀初期の英国における徳と商業—』(拙訳)、八千代出版、一九九〇年、第一章を参照。

(6) Daniel Defoe, *A Plan of the English Commerce, being a Compleat Project of the Trade of this Nature, as well the Home Trade as the Foreign*, Second Edition (1730), Reprints of Economic Classics, 1967, p. 193. フォー『イギリス経済の構図』(山下幸夫・天川潤次郎訳)、

- 東京大学出版会、一九七五年、一八〇頁。
- (7) *Ibid.*, p. 79. 邦訳、八四頁。
- (8) デフォォーは著作『イギリス通商案』の中では、以下のように述べている。「国民は一般に暮らし向きがよいので、つまり中流の商業を営む勤勉な人たちはかなりよい生活をしているので、国内だけでなく外国の産物をも大量に消費する。このようなことは世界のいかなる国家にも真似できない」と。(D・デフォォー『イギリス通商案』(泉谷治訳)、法政大学出版局、二〇一〇年、六六頁。)
- (9) Daniel Defoe, *op. cit.*, p. 101. 邦訳、一〇二頁。
- (10) *Ibid.*, pp. 101-2. 邦訳、一〇三―四頁。
- (11) Thomas. A. Horne, *op.cit.*, p. 53. 邦訳、七七頁。
- (12) G・H・トレヴェリアン『イギリス社会史』(松浦高嶺・今井宏訳)、II、みすず書房、一九八三年、二七六頁。
- (13) 玉木俊明、前掲書、一九〇―七頁。
- (14) Thomas. A. Horne, *op. cit.*, p. 53. 邦訳、七八頁。
- (15) 南海会社は中南米との奴隷貿易を行うために設立され、その株式が投機の対象となって狂気じみた株式投機ブームを引き起こし、ロンドンを中心にイギリス全体が沸き立った状態になったが、一七二〇年ついにガラが引き起こされ、バブルがはじけた。(長島伸一、前掲書、一五―七頁。)
- (16) Cf. E. Royston Pike, *Human Documents of Adam Smith*, 1974, pp. 94-108.
- (17) Bernard Mandeville, *The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits*, 1714, with A Commentary Critical, Historical, and Explanatory by F. B. Kaye, Liberty Classics (rep. ed), 1988, vol. 1, p. 129. バーナー・マンデヴィル『蜂の寓話―私悪すなわち公益―』(泉谷治訳)、法政大学出版局、一九八五年、一一八―九頁。
- (18) 衍示的消費が、どのように考えられてきたかを資本主義の黎明期にさかのぼって追跡した文献として、以下のものは一読に値する。ロジャー・メイソン『顕示的消費の経済学』(鈴木信雄・橋本努・高哲男訳)、名古屋大学出版会、二〇〇〇年。
- (19) ソースタイン・ヴェブレレン『有閑階級の理論』(小原敬士訳)、岩波文庫、昭和四八年、八六頁。
- (20) ヴェルナー・ゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』(金森誠也訳)、講談社学術文庫、二〇〇〇年を参照。
- (21) ついでに言えば、資本主義を助長したもう一つの要素は戦争である、とゾンバルトは言う。彼は著作『戦争と資本主義』において、「戦争がなければ、そもそも資本主義は存在しなかった」と述べ、通常、戦争は文化や経済を破壊し、したがって資本主義の成果にも大損害を与えると考えられているけれども、実は資本主義を大いに促進している、と力説するのである。(ヴェルナー・ゾンバルト『戦争と資本主義』(金森誠也訳)、講談社学術文庫、二〇一〇年、二四頁。)



### 三 街示的消費の浸透と各種レジャー施設 の誕生

上にも触れたように、イギリス社会において奢侈品や贅沢品の類いに対する需要が強く、海外植民地の新奇な商品、物産の消費習慣は、とりわけ上流貴族や新興の上流市民層に著しく、さまざまな奢侈品や装飾品を所有したり使用したりしながら、新たな生活様式や階級的シンボルを生みだしていった。消費革命と言えるような一種の消費ブームは、決して生活必需品の範囲が拡大したために生じたのではなく、身分や地位を表象するような新奇な商品や物産の登場によって生じたものである。

しかも重要なことは、先にも述べたように新奇な商品や物産が競って消費されたとき、そこには社会的地位や身分をめぐる人々の名誉と面子をかけた競争があったと言いうことである。つまり商品や物産がステイタス・ゲームの印になり、速やかに消費されていった。宮廷や貴族という社会の上流階級において奢侈品や新奇な商品が流行すると、それはより下層の人々に見せびらかされ、新興の上流市民を目指す成上り者、上位の階層を狙う野心

家が模倣する。上流階級における流行やブームは、あたかも雫が滴るように下位の階層に普及していく。

階層的なイギリス社会では、たとえばマクラッケンが言っているように「衣服のファッションが宮廷にはじまり、下位者の模倣と上位者の差異化という二重のエンジンに容赦なく駆りたてられて、貴族、ジェントルマン層、中流クラス、下層クラスへと移行する<sup>①</sup>」消費の社会的競争は、前に述べたヴェブレンのいう「街示的消費」とジンメルのいう「トリクル・ダウン（滴下）効果」を両輪として進行していく<sup>②</sup>。これがイギリスにおいて、消費革命ひいては生活革命を生み出したのである。ヴェブレンをフォローしながら、マッケンドリックは社会的競争が、この革命の原動力だったと述べている。すなわち「これらの特徴——緊密な階層化されたイギリス社会の性質、垂直の社会移動への努力、社会的対抗心によって培われた対抗支出、社会的競争によって生まれたファッションの強制力——が、広範囲に行き渡った支出能力と結びついて、前例のない消費癖をつくり出したのである<sup>③</sup>」と。

したがって一八世紀におけるイギリス社会の消費革命、

消費ブームを生み出したものは、人々の「虚栄心」であり、また「利己心」だと言うこともできよう。社会的地位をめぐる競争である。これは生活必需品の争奪戦ではなく、名誉と虚栄をめぐる模倣と競争であつた。確かに人は、ただ必要なものを飲食し、生命を維持したり、生存のための必需品に取り囲まれて生活しているだけではない。常に社会の中にあつて、他人の目を気にし、他者の評価を得て、尊敬を受け、より上の地位を獲得し、他人に多少の差をつけたいと思つている。自尊心や嫉妬心が人を突き動かしている。そうだとすると、人間の欲望は、ただ物質的なものの生理的満足ではなく、ヘーゲルが力説したように、他者からの「承認」を得、さらには「尊敬」を得るといふ「優越願望」を持つところにこそある。

加えて言えば、この優越願望を満たすために「富や権力や名利」は、誰もが欲しがるものである。権力を得るために、他人を蹴落したり、他人の足を引っ張ることは、常日頃、何時でも行われている。また一度手にした権力は、死んでも離さないようになる。権力を手にすると人が変つたようになるものである。名利もまた甘い蜜のよ

うな魅力をもつ。人が年をとると、名利の念は一層強くなると言われる。富や権力を得たあとで人間が最後に欲しがるものは、名誉である。死去すれば、富や権力は何も残らないものであるが、名利は墓に記すことができるものである。これらの欲望を満たすためには、義理人情をはじめ、あらゆる犠牲を払つても得ようとする。さまざまな組織において、長と名づけられる地位を如何に渴望することか。所詮は死ぬ人生であり、空無に帰する人生であることが、理性では分かつていても、なお且つ、これらの欲望を追求するところに人間の悲しきがある。

こうして人間は、ただ生存だけでなく社会の中で絶えず行われる「富と権力と名利」の追求による社会的評価をめぐつて生存競争を繰り返していると云つてよいだろう。したがつて消費も生理的欲求を満たすためにあるのではなく、自己を社会の中で他者の前にさらし、承認や尊敬を得るためにこそある。つまり人を消費へと突き動かしているものは、人のもつ虚栄なのである。消費をこのように考えたとき、消費はもはや量の問題ではなく質の問題に転化している。もし仮に、消費の量が問題だとしても、それは、その量が生理的な欠乏を充足させるか

らではなく、虚栄心がわれわれをして、他者よりも多量の奢侈品や贅沢品を持つよう突き動かすからなのである。こうして消費のすべてではないにせよ、そのかなりの部分は、生存のための生活必需品ではなく、上流階級のシンボルである貴族的な生活を模倣する多少の奢侈品、装飾品であり、洗練された趣味を表す財貨であり、上流のマナーを示す流行品であった。人々にとって、虚栄心や優越願望がもたらす奢侈品、新奇な商品・物産の消費や流行を追うことが、それなりに生活の洗練や心地よい社交をもたらすのである。欲望は生理的的必要ではなく、社会における「模倣的競争」によって生じるのである。

こうした社会現象を背景にして、一役買ったのが各種レジャー施設や社交場の整備であった。ロンドンが名高い大火に見舞われたのは、一六六〇年であった。<sup>7</sup>木造家屋や狭く曲がりくねった街路や悪臭を放つ下水溝に象徴される旧ロンドン市を大火は、根こそぎ焼き払った。<sup>8</sup>一六六七年に公布された「再建法」によって、新ロンドンには「都市の美化を計るとともに火災による類焼の危険を未然に防ぐため、街路の拡張を計り、家は煉瓦造り」<sup>9</sup>となるに至った。これと並行して、その外、ロンドン商

業区には金融機関の施設が完備し、宮殿や邸宅がウエストミンスター地区などで競って建築され、各種の娯楽やゲームが考案され、また劇場、音楽堂、社交場、歓楽場が各地で多く開設された。その他に、コーヒー・ハウス、バー、サロンが賑わいを見せ、闘鶏、闘犬、牛いじめ、熊いじめ、サーカスなどの見世物が栄えた。<sup>10</sup>

一八世紀のロンドンには、とりわけコーヒー・ハウスのような新興の上流市民が自由に出入りすることのできる社交場が数多く誕生したことは特記すべきであろう。<sup>11</sup>コーヒーや茶、チョコレートなどのエキゾチックな飲み物を飲みながら、不特定多数の人々が自由に論争し合ったコーヒー・ハウスは、ピューリタン革命の後に発達した。コーヒー・ハウスは革命後の社会に特有の階層秩序の乱れた自由闊達な時代の雰囲気を反映して発達してきたものである。<sup>12</sup>イギリスで最初のコーヒー・ハウスは、一六五〇年に大学の町オックスフォードに誕生したが、その二年後にはロンドンにもでき、たちまち大流行となった。一七〇〇年前後になると、ロンドンだけで数千軒が営業していたと言われる。<sup>13</sup>お茶愛好の広がりの中で、代表的茶販売の店も産声をあげている。日本でもお

馴染みのトワイニングである。初代トーマスが一七〇六年にコーヒー・ハウスを始め、一三年には「ゴールドン・ライオン」なる茶葉売り専用の店を出して以来、連綿と茶販売を続けているトワイニング家の歴史は、そのままイギリスのお茶愛好の歴史だとさえ言われている。<sup>14</sup>

さて、コーヒー・ハウスでは各種の新聞がそろえられ、<sup>15</sup>販売され、文字の読めない人のために、しばしば音読もされていた。こうした場合は、貴族の館で開かれたサロンなどとともに文芸活動やジャーナリズムの進展を支え、啓蒙思想<sup>16</sup>を広め、また世論を形成していったのである。株式などの証券の取引もコーヒー・ハウスでなされ、ここは経済上の取引きの場でもあった。しかし、経済活動に関してコーヒー・ハウスの真価が発揮されたのは、情報センターとしての機能においてである。今日でも世界の海運・海上保険に関する情報のすべてが、ここに集中していると言われる「ロイズ」は、その典型的な例であった。のちにイギリス経済の屋台骨を担うことになった海運・海上保険業は、まさにコーヒー・ハウスをゆりかごととして発展したのである。<sup>17</sup> 加えて同じ意見をもつ者同志が、次第に特定の店に集合するようになったた

め、トリーとホイッグの初期の政党もコーヒー・ハウスで誕生した。近代科学を育んだ王立協会も、コーヒー・ハウスを舞台として成立した。<sup>18</sup>

化学者ロバート・ボイルや建築家クリストファー・レンが王立協会の創始者であった。のちには、引力の発見者で偉大な物理学者であったニュートンも、この協会の会長を務めている。一七世紀後半のイギリスでは、彼らを中心に多くの科学者が出現し、物理学をはじめ近代科学の基礎が確立し「科学革命」と呼ばれる現象が起ったが科学革命は、まさにコーヒー・ハウスでの集会と情報交換から生まれたのである。<sup>19</sup> 市民に人気のあった文学作品は、この時代の現実をよく反映していた。一八世紀前半のイギリス小説としてよく知られているデフォーの『ロビンソン・クルーソー』とスウィフトの『ガリヴァー旅行記』は、いずれもこの時代に盛んであった海上貿易や海外の植民活動をもとに書かれたものであった。憩いの場所としては、キュー・ガーデンや動物園や各種の公園があり、また歓楽場としてヴォクソール大庭園やラニラ大庭園などが開設された。キュー・ガーデンは一七五九年、ジョージ三世の母后オーガスタが開いたも



ので二万五千種以上の植物が植えてある。また一八世紀には、中国で造園と建築を学び、五年間キュー・ガーデンの造営に携ったサー・ウィリアム・チェンバースは、中国風のパゴダを建て人の目を喜ばせていた。<sup>(20)</sup> ヴォクソールとラニラの二大庭園については、シユウォーツは次のように言及している。

「ヴォクソール庭園は、おとぎ話に出てきそうな雰囲気、ラニラ庭園の優雅さとは対照的であった。ヴォクソール庭園は、夏のリゾート用として造られていたが、ラニラ庭園には大きな暖炉が中央にある幅百八十五フィートの円形の広間があつて、どんな天候の時にでも楽しめる造りとなつていた。そこはお茶を飲んだり、人を眺めたり、人に見てもらつたりする場所であつた。<sup>(21)</sup>」

見られるようにヴォクソールやラニラの二大「社交用庭園」では、そこに行く人々が他人を「見たり、見られたり」すること、つまり強烈な自己顕示欲に支えられた社交が繰り広げられたのである。<sup>(22)</sup>

この他、社交都市としてバース、タンブリッジウェールズなどの温泉地が賑わいを見せ、ブライトンなどの夏の保養地が繁栄した。とりわけバースは、この時期に鉦

水を服用する湯治場という旧来の性格に、ロンドンの社交場をバースに持ち込むという新たな性格が加わったから、第一級の賑わいを見せた。ここには上述のコーヒー・ハウス、劇場、公園、散歩道、教会は言うに及ばず、舞踏会や賭博場まで、上流社会の生活と文化の必需品はすべて備わつていた。<sup>(23)</sup> ロンドンのような大都市から地方への生活文化の伝播を可能にしたものに「社交季節」<sup>(24)</sup>の成立、すなわち地方のジェントルマンがロンドンや温泉地で、またロンドンのジェントルマンが温泉地で一定期間、社交生活を送るという習慣が挙げられる。こうしてロンドン以外の地方都市でも、都市的な生活文化が定着してきたのである。つまり、前に述べたボーゼイのいう「都市ルネサンス」の成立があつたことは重要である。

(1) G・マクラッケン『文化と消費とシンボルと』（小池和子訳）、勁草書房、一九九〇年、四二二頁。

(2) 吉見俊哉「消費社会論の系譜と現在」（『岩波講座現代社会学』21巻、岩波書店、一九九六年、所収）、松原隆一郎『消費資本主義のゆくえ』、ちくま新書、二〇〇三年、三四―三五頁を参照。

- (3) N. Mckenrick, J. Brewer, and J. H. Plump, *op. cit.*, p. 11.
- (4) 佐伯啓思『欲望と資本主義』、講談社現代新書、二〇一〇年、一一三頁。
- (5) 佐伯啓思『成長経済の終焉』、ダイヤモンド社、二〇〇〇年、二六六頁。
- (6) 友松圓諦『法句経講義』、講談社学術文庫、昭和五八年、第二講、鎌田茂雄『現代人の仏教』、講談社学術文庫、一九九八年、第五章、『ブッタのことば—スッタニパータ—』(中村元訳)、岩波文庫、二〇〇七年、第四章を参照。
- (7) George Rudé, *Hanoverian London 1714-1808*, 1971, pp. 45-6.
- (8) リチャード・B・シュウォーツ『十八世紀ロンドンの日常生活』(玉井東助・江藤秀一訳)、研究社出版、一九九〇年、五一頁。
- (9) 長島伸一、前掲書、三三頁。
- (10) H. Cunningham, *Leisure in the Industrial Revolution*, 1980, pp. 9, 16, 22-4. D. Alexander, *Retailing in England during the Industrial Revolution*, 1970, p. 231.
- (11) 角山栄『茶の世界史』(改版)、中公新書、二〇一七年、三一—四一頁。
- (12) 川北稔『イギリス繁栄のあとさき』、講談社学術文庫、二〇一四年、一四〇頁。
- (13) 川北稔『世界システム論講義』、ちくま学芸文庫、二〇一六年、一〇八頁。
- (14) 松浦京子「ティー・ブレイクでほっと一息」(指昭博編著『生活文化のイギリス史—紅茶からギャンブルまで—』、同文館、平成八年、所収)、八頁。
- (15) リチャード・B・シュウォーツ、前掲書、九〇頁。
- (16) 啓蒙思想に関する文献は、世に多く出ているが、とりあえず、ロイ・ポーター『啓蒙思想』(見市雅俊訳)、岩波書店、二〇〇四年、赤木昭三・赤木富美子『サロンの思想史—デカルトから啓蒙思想へ—』、名古屋大学出版会、二〇〇三年など参照。
- (17) 角山栄・村岡健次・川北稔『産業革命と民衆』、河出書房新社、一九九二年、一〇八—九頁。
- (18) 岩切正介『男たちの仕事場—近代のロンドンのコーヒー・ハウス—』、法政大学出版局、二〇〇九年、第四章、第五章を参照。
- (19) 川北稔『砂糖の世界史』、岩波書店、一九九六年、九四—六頁。
- (20) R・J・ミッチェル/M・D・R・リーズ『ロンドン庶民生活史』(松村越訳)、みすず書房、一九八二年、一二二頁。
- (21) リチャード・B・シュウォーツ、前掲書、一一四—五頁。
- (22) 川北稔編『非労働時間の生活史—英国風ライフ・スタイルの誕生—』、リブレポート、一九八七年、四一頁。

- (23) 蛭川久康『パースの肖像―イギリス十八世紀社交風俗事情―』、研究社出版、一九九〇年、第四章を参照。
- (24) 社交季節の成立に關しては、川北稔編『非労働時間の生活史』（前出）、四三―四頁を参照。

#### 四 消費社会における奢侈と逸楽の賛否

##### 両論

イギリス国内に各種レジャー施設や娯楽場などが数多く出現するとともに、イギリスの社会に蔓延した奢侈的な雰囲気と逸楽の風潮に対して、聖職者を含む支配者層有識者層の間にさまざまな反応を起したことは当然であつた。奢侈的な暮らし、贅沢三昧な生活そして逸楽の風潮は、キリスト教の美德であり且つ古代共和制以来の美德でもあつた勤勉・節約・質素に対立し、道德や風俗を腐敗させるものとして非難された。それはまた、社会秩序を乱す要因にもなると考えられていた。

国民大衆の奢侈的な暮らしぶりと逸楽の風潮を憂慮して、一六九〇年より一七六〇年頃まで「風俗改革協会」が設立され、これによって社会の浄化を図りキリスト教道德を社会に浸透させようとしたことは、先に述べた通

りである。この協会による風俗改革の運動は、飲酒の節制、劇場の浄化、安息日の厳守、売買春の禁止などを当面の目標とし、何よりもまず奢侈や逸楽の風潮を改め、質実剛健の氣風を国民大衆すべてに広めようとする国民運動であつた<sup>①</sup>。と同時に、これは単に道德的運動であるばかりでなく、外国産の奢侈品や新奇な商品―たとえばフランスのぶどう酒・絹織物、インドのキャラコーの輸入や使用を禁止し、国民的産業の育成を図ろうとする経済的意義をも担つていたことに留意する必要がある<sup>②</sup>。

聖職者たちの見解でも奢侈の隆盛、享樂の風潮は国民大衆を墮落退廃させるものとして、キリスト教の美德である勤勉・節約・質素の励行を国民大衆に勧めた。また当時の新興の商工業者をその一角に含む中産階級に対しては、リチャード・ステイルは『商人の天職』、デフォーは『イギリス商人大鑑』において職業倫理として勤勉・節約・質素の徳を勧めたことは注目されてよいだろう。このように当時、社会通念の見解では、キリスト教や古代共和制の下で重視されていた勤勉・節約・質素が美德であり、奢侈・貪欲・虚栄・高慢は悪徳であると考えられていた<sup>③</sup>。このため当時のイギリス社会の聖職者

を含む支配者層、有識者層は国内の奢侈的雰囲気や逸楽の風潮を矯正しようと、前にも述べた風俗改革協会を設立し社会の倫理化、世直し運動を展開したのである。

だがこの運動は、必ずしも成功したわけではなかった。たとえば聖職者ヘンリー・サッシュベレルは、宗教界の支持を得て行われた道德の普及運動、風俗の刷新運動にも反対した<sup>(4)</sup>。加えて法律の厳格な実施によって悪徳を排除して、美德に満ち溢れたイギリスを生みだすだろうと期待された治安判事たちの中にも、反対者があった。結果的には、この運動は、さほど実効が上がりず立ち消えとなった<sup>(5)</sup>。

その失敗原因については、さまざまな意見があったが、社会の風俗の刷新運動をやっても実効が上がらなかった根本的な理由は、いわば時代の経済的要請と言ったものが、その背後に横たわっていたように思われる。それは奢侈や贅沢を悪徳とするキリスト教、とりわけプロテスタントの倫理が、別の側面では同時に営利活動をも是認することによって、商業(経済)発展の原動力になり、しかも奢侈や贅沢もまた当時の経済状況の下では、商業(経済)発展に寄与し、いわばキリスト教倫理と経

済的要請との間に葛藤と矛盾をはらむ複雑な事情が介在したからである。換言すれば、この時期、キリスト教倫理としての勤勉・節約・質素と、他方イギリス社会の経済的發展とともに必然的に生まれた奢侈問題とが、対立する形で存在したのである。

このように、この時期、現実の経済の姿と、あるべき道德の理想像との対立・矛盾が正面衝突するという複雑な事情があったが、そうした中で、奢侈や贅沢に対する是非、賛否は、単に道德的観点からばかり議論されたわけでは決していない。他方では、少数派であるが一部の論者の間では、経済的観点からの奢侈の弁護・擁護つまり奢侈の経済的効用の議論もなされたのである。経済的観点からの奢侈弁護は、早くも一五九八年にラフェマスの著作の中に見い出される。国内生産を刺激する奢侈品や贅沢品への支出は、好ましいとして是認しているのである。また雇用の視点から、奢侈的支出は貧困な大勢の人々を雇用するという理由で有益であるとしている。また、たとえばジャン・ポチエ・ド・エストロワは、その著作の中で「流行は無益な支出の原因となるけれども、もし金持ちが自らの富をこのように減らすならば、彼ら



はまた同時に、多くの貧困家庭を扶養することは確實であろう<sup>⑥</sup>と述べている。

いっそう体系的な奢侈弁護は、一七世紀後半、ニコラス・バーボンとダッドレー・ノースによっても主張された。彼らは外国から輸入された奢侈品であっても、ある状況の下では、これらへの支出を禁止すべきではないと力説した。また彼らは、家庭経済と国家経済とは本質的に異なることを強調し、個人や家庭が奢侈品を節度なく購入すれば破産するが、国家経済の場合、同様のことは妥当しないと考えていた。

一六九〇年には、バーボンは『交易論』の中で奢侈禁止法に関するトーマス・マンの勧告に反対を唱え、「儉約は人間には妥当するが、国家には妥当しない<sup>⑦</sup>」とか、「浪費は人間にとって有害な悪徳であるが、交易にとってはそうではない<sup>⑧</sup>」と主張した。さらに続けてバーボンは、流行の変化によって引き起こされる交易とか、建築に費やす富者の浪費によって、社会の誰もが利益を受けると主張する。

彼が言うには「流行すなわち衣装の変化は、交易を大いに促進するものである。……それは交易の精神であり

生命である。……それは交易という大きな全体をたえず運動せしめる<sup>⑨</sup>」と。また「建築は交易の最も主要な促進手段である。それは食や衣よりもずっと多数の職人と人々を雇用する。建築業に属する工人、たとえば煉瓦職人、大工、左官などは、多くの人手を雇用する。煉瓦、石灰、タイルなどのような建築の材料を製造する人々は、さらに多くの人々を雇用する。さらに家具職人、白ろう細工師などのような、家屋に家具をとりつける人々を加えると、彼らはほとんど無数である<sup>⑩</sup>」と。

これらの議論はダッドレー・ノースに引き継がれ、彼は著作『交易論』の中で同様の見解を開示している。ノースは「交易に対する、あるいはむしろ勤勉と器用に對する、主な拍車は、人々の途方もなく大きい欲望である<sup>⑪</sup>」と述べ、また「ある商人は、彼の隣人が四頭立ての馬車を走らせているのを見ると、ただちに全力をあげて同様のことをしようとして活動し始める。そしてそのためになんか貧乏になることがある。しかし、虚栄心を満たそうとして彼が示す異常な傾倒は、彼自身にとっては、無駄だったかも知れないが、社会にとっては利益になる<sup>⑫</sup>」と言っている。

この引用文には、人間のもつ競争心や虚栄心は、人間に奢侈品や贅沢品を要求させ、そのことが社会にとって利益になることが語られている。またノースは「奢侈禁止法を有する国々は、一般に貧しい」<sup>(13)</sup>ことに注目し、バーボンと同様、彼は個人や家族を富ます手段と国家を富ます手段との相違を認めている。

バーボンやノースの議論は、バーナード・マンデヴィルに継承され、奢侈弁護論は彼の著作『蜂の寓話』<sup>(14)</sup>の出版によつて頂点に達した。本書においてマンデヴィルは「蜜蜂どもは人間なみの生活をし、小規模ながら人間の行為とそっくり」<sup>(15)</sup>と前置きして、蜜蜂の社会を借りて当時のイギリス社会を風刺するのが自分の意図であることを断つたうえで、

「奢侈は貧乏人を百万も雇い

いとわしい自負はもう百万雇つた。

羨望そのものや虚栄は

精励の召使いであつた。

彼らお気に入りのおかしさは

あの奇妙でばかげた悪徳の

食べ物や家具や衣服の気まぐれで

これは商売を動かす車輪になつた。」<sup>(16)</sup>  
と結んでいる。

ここには、富者の奢侈的支出が貧者を雇用する、また虚栄心による奢侈品や贅沢品、新奇な商品の追求は経済を活発にすると言うマンデヴィルの主張が示されている。加えて聖職者をその一角に含む支配階級やテンプルなどによつて強調された儉約の効果は、経済の沈滞を招き不幸をもたらすと主張し、マンデヴィルは以下のように言う。もし人々が着物一式しか持たず、あるいは古い住宅が十分に役立っている限り新しい豪華な邸宅を建てないとすれば、「石工や大工やレンガ職人などの四分の三は、仕事を失うであろう。建築業がひとたび破壊すれば、……奢侈に貢献している絵かき業や彫刻業やそのほかの技芸は、どうなるであろうか」<sup>(17)</sup>と言ひ、さらに続けて「節約と呼ぶ者もいるこの慎重な節用が、個人の家庭では財産を殖やす一番確実な方法であるところから、ある国が不毛であろうと多産であろうと、同じ方法が全体的に取られるならば、国家全体にも同じ効果をもたらさざらう、とある人々は考えている。……これは誤りだと私は思う」<sup>(18)</sup>と述べている。

また虚栄心、競争心、高慢によって引き起こされる珍奇な財貨、奢侈品の追求は、経済全体によりよい影響をおよぼすと言う。それは人々の勤労意欲を刺激する。奢侈品や贅沢品を所有することで隣人に追いつこうとしたり、優越しようとする欲求は、人間に「生来の無垢や愚鈍」<sup>19</sup>から目をさまさせる最も重要な手段の一つであるとまで言う。

- (1) Thomas. A. Horne, *op. cit.*, p. 1. 邦訳、一頁。
- (2) 天川潤次郎「デフォアの奢侈論」『経済学論究』、第一七卷第二号、関西学院大学経済研究会、七二―四頁。
- (3) たとえば、ロバート・W・マーカムソン『英国社会の民衆娯楽』（川島昭夫他訳）、平凡社、一九九三年、第一章を参照。
- (4) Thomas. A. Horne, *op. cit.*, p. 4. 邦訳、五頁。
- (5) *Ibid.*, p. 4. 邦訳、五頁。
- (6) *Ibid.*, p. 57. 邦訳、八二頁。
- (7) Nicolas Barbon, *A Discourse of Trade*, 1690, A Reprint of Economic Tracts, edited by Jacob. H. Hollander, 1903, p. 11. バーボン／ノース『交易論』（久保芳和訳）、東京大学出版会、一九七五年、一一―二頁。
- (8) *Ibid.*, p. 32. 邦訳、四五頁。

- (9) *Ibid.*, p. 33. 邦訳、四六頁。
- (10) *Ibid.*, p. 34. 邦訳、四八頁。
- (11) Sir Dudley North, *Discourse upon Trade*, 1691, A Reprint of Economic Tracts, edited by Jacob. H. Hollander, 1907, p. 27. バーボン／ノース『交易論』（久保芳和訳）、東京大学出版会、一九七五年、三九頁。
- (12) *Ibid.*, pp. 27-8. 邦訳、四〇頁。
- (13) *Ibid.*, p. 27. 邦訳、四〇頁。
- (14) マンデヴィルは、当時の社会通念に反して真向から奢侈的支出あるいは衛示的消費の効用を説いた。有名な「私悪すなわち公益」という断定は世の輦感をかい、当時の支配階級や保守的な思想家はもとより、ヒュームのような革新的な思想家からも批判された。しかし彼は、恐れることなく『蜂の寓話』、『続蜂の寓話』で批判に答えた。(James Buchan, *The authentic Adam Smith: his life and ideas*, 2006, pp. 19-20. ジェイムズ・バカン『真説アダム・スミス―その生涯と思想をたどる―』（山岡洋一訳）、日系BP社、二〇〇九年、三二頁。)
- (15) Bernard Mandeville, *op. cit.*, p. 18. 邦訳、一一頁。
- (16) *Ibid.*, p. 25. 邦訳、一一頁。
- (17) *Ibid.*, p. 223. 邦訳、二〇四頁。
- (18) *Ibid.*, p. 182. 邦訳、一六七頁。
- (19) *Ibid.*, p. 206. 邦訳、一八八頁。

## 五 結びにかえて

一六六〇年頃から一七六〇年頃までの期間は、イギリスにとって商業革命の時代であり、この革命によつて輸入品目も新大陸やアジア、アフリカ地域からの茶、タバコ、砂糖、綿製品などの再輸出品を含む目新しい商品や物産に様変わりをし、それに伴つてイギリス社会に消費生活の変革をもたらし、新しい消費習慣を中心とする生活様式の変革、すなわち生活革命<sup>①</sup>と呼ばれる現象を生み出したことは、すでに触れたところである。

新しい消費習慣による奢侈と逸楽の現象の真只中であつて、人々の生活態度には当然のことながら、虚栄や流行を追う風潮が生じてくる。イギリスの社会構造は、とりわけ密接な結びつきをその特徴とし、その結果、各階層は、すぐ上位の階層の行動様式や生活態度を模倣し、機会があればその仲間入りをしようとするのを待ち受けていた。パーキンによれば、一八世紀のイギリス社会は「二、三の階級からなる階級社会といったものからは程遠く、数十にもものぼる階級の積み重ねであつた<sup>②</sup>」と言

人々は競つてステイタス・シンボルとしての新奇な商品や奢侈品を購入し、それらの商品の使用を誇示した。それに加えて、興行として闘鶏、熊いじめなどが流行し、また各種レジャー施設や歓楽場が完備し、舞踏会が夜毎に開かれ、賭博などが世間で盛んに行われるようになったのも、この時期であつた。こうした社会状況の中で、すでに述べたように、世間の逸楽と奢侈の風潮に対する是非についての議論が沸騰した。

議論は道徳的観点のみならず、経済的観点からもなされた。道徳的観点からの批判は、主として聖職者を含む支配者層の間から起こつたもので、奢侈はキリスト教の美德および古代共和制以来の美德であつた勤勉・節約・質素に対立し、道徳や風俗を腐敗させるものとされた。他方における経済的観点からは、奢侈という消費が生み出す有効需要を盾に、奢侈の経済的効用を論じ、国内産業育成と雇用に対する奢侈の効用を説いたものであつた。このような奢侈に対する賛否両論があつたが、いずれにせよ、宮廷や貴族といった社会の上流階級の人々はもちろんのこと、イギリスの国民大衆、労働者の間にも奢侈的支出あるいは衛示的消費といった消費ブーム、奢侈



ブーム、レジャーブームの時期があったからこそ、のちの産業革命が始まったことを忘れてはならないだろう。

さらに加えて言えば、イギリスの国民大衆の消費意欲を助長したものとして、マンデヴィルが力説したように、各階層の人々の間には、すぐ上位の階層の行動様式や生活態度を模倣し、機会があればその仲間入りをしようという虚栄や優越願望に基づく社会的競争が、やがて産業革命の重要な社会的要因となったのである。またこの時期、労働の基本的動機が変化したことも忘れてはならないだろう。<sup>③</sup>労働の基本的動機をピュリタニズムの精神に求めようとするマックス・ウェーバー的な見解は、産業革命の前提となった消費や需要がどこから来たのかを説明しえないと言う難点が残るのではないか。その上、経済成長の要因をもつばら消費や需要に求めることは誤りだとしても、逆に、それがもつばら生産の要因に帰することも一面的であると言わざるを得ないだろう。<sup>④</sup>

産業革命が世界に先駆けてイギリスで起こった一つの大きな理由として、商業革命を背景に起こった経済変化は、イギリスの社会生活に大きな変化をもたらし、生活革命と呼ばれる現象を生みだし、その結果、消費ブーム、

奢侈ブーム、レジャーブームが起こり、一種の大量消費、大衆消費の時代がイギリス社会に訪れたことも忘れてはならないであろう。<sup>⑤</sup>それに加えて、前述のように、この大量且つ旺盛な消費は、隣国フランスの二倍に上る高賃金に裏づけられたイギリスの国民大衆、労働者の生活水準の上昇にその基礎を置くものであったことも忘れてはならないであろう。<sup>⑥</sup>

(1) そもそもイギリスでこのような生活革命が成立した背景には、すでに一七世紀初頭に「奢侈禁止法」と総称された法体系が、世界で最初に全廃され、身分による消費生活への法的規制がなくなっていたという事実がある。人は身分によって生活を規制されるのではなく、どのような生活をしているかによってその地位を判断されるようになったのである。その上、ピュリタン革命時の内戦によって、階級秩序そのものもかなり動揺したから、非ヨーロッパ世界から来た新奇な商品をベースとする新しい生活様式が、いわばステイタス・シンボルそのものとなったのである。こうして、全国民による消費競争が始まり、全国・全階層を包括する国内市場が成立した。近代的な意味での「流行」もここからスタートした。消費が経済を引っ張る条件が成立したのである。(川北稔

『イギリス繁栄のあとさき』（前出）、一四一—四頁を参照。）

- (2) H. J. Perkin, “The Social Causes of the British Industrial Revolution”, in *Transactions of the Royal Historical Society*, vol. 18, 1968, p. 129.
- (3) 井上和雄『資本主義と人間らしさ』、日本経済評論社、一九八八年、三〇〇—三頁を参照。
- (4) 川北稔『イギリス繁栄のあとさき』（前出）、八四—五頁。
- (5) 角山栄・村岡健次・川北稔、前掲書、六八—七五頁。
- (6) D・S・ランダース、前掲書、二六一頁。